

特 集

コロナ禍を過ごした大学生の孤立と不安

阿 部 晃 士

1. 本稿の目的と方法

本稿の目的は、コロナ禍という未曾有の事態における大学生の生活を、孤立と不安という観点から分析し、このような状況における学生支援のあり方を検討することである。

2019年（令和元年）末からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な流行により、大学生活のあり方は大きな影響を受けた。感染のリスクを避けるため、キャンパスに通うことさえかなわない時期があり、授業は対面では受講できずオンライン授業に対応せざるを得なくなった。また、サークル活動や部活動、アルバイトなど、学業以外の側面での制約も大きく、友人と会うこと、あるいは友人や知人を作る機会も損なわれることになった。

このような急激な変化にさらされ、学生の対人関係や、精神的健康に何らかの影響がもたらされるのではないか。それをどのようにサポートできるのか。こうした問題意識は、教育に携わる多くの研究者に共通するものであり、キャンパスに通えない状況やオンライン授業への対応、精神的健康などに着目した、コロナ禍の学生の様子を探る調査が数多くおこなわれた。例えば、伊藤ら（2021）は、大学を知らないままに自粛生活に突入した1年生が大学生活についての不安や戸惑いを強く感じていること、一人暮らしの下宿生が大きなストレスに耐えていること、学生が勉学や将来への不安だけでなく、コロナ禍による収入面への不安や自粛生活でのストレスを抱えていることを示した。また、石川（2022）は、大学生の不安感とストレスについて2時点で調査を実施し、2020年度よりも2021年度の方が、学業成績や体調不良、生活が制限されることに対する不安がやや高まっていること、他の学年に比べると、1年生は授業への不安が高いことを明らかにしている。

パネルデータを用いた分析によれば、コロナ禍の19歳・20歳の学生は、アルバイトができなくなる、学校や授業に対する否定的な見方が増えるといった傾向があり、女子の精神的健康が徐々に悪化しているという（藤原 2021）。中澤ら（2021）も、学校生活に対する悪影響が女子で長期化していること、もともと男子よりも悪い女子のメンタルヘルスが、コロナ禍でさらに悪化していることを指摘した⁽¹⁾。

本稿では、大学生がどれだけのサポート・ネットワークを保有しているかという社会関係資本の観点から学生の孤立の状況を記述するとともに、不安感や抑うつ傾向との関連を検討していく。

分析には、2023年1月から2月にかけて山形大学人文社会科学部附属安全安心価値創造研究所が実施した「コロナ禍の学生生活に関する調査」のデータを用いる。調査対象は山形大学人文社

会科学部の1年生から4年生である。調査方法はGoogle フォームを用いたWeb調査で、有効回答者は444人（4学年分の入学定員の合計1,160人の38.3%）であった。本稿では、このうち他学部の履修者など11人を除いた433人の回答を分析する。

なお、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが「5類感染症」となったのは2023年5月8日だが、それ以前にも基本的感染症対策をおこないながら社会生活を営むことが試みられていた。調査を実施した2023年の1月から2月は、大学では後期の授業終盤から期末試験にかけての時期だが、山形大学小白川キャンパスでは、ほとんどの授業や期末試験が対面で実施されていた（本多 2024）。

本稿で扱うデータはコロナ禍前からのパネル調査ではないこと、また、新型コロナウイルス感染症の流行が取りつつあるとの認識がなされるようになっていた時期の横断調査であることを確認しておきたい。

調査方法や回答者の属性についての詳細は、本特集における調査の目的と概要（阿部 2024）を参照されたい。

2. コロナ禍での学生生活

最初に、コロナ禍における学生生活の様子を記述しておこう。

表1は、「新型コロナウイルス感染症が流行した影響で、次のような経験をしましたか。」と複数回答で尋ねた質問の回答の、学年別によるクロス集計表である。全体では、「高校時代に学校行事ができなかった」（45.5%）、「大学での部活動やサークル活動が思うようにできなかった」（43.6%）、「高校時代の部活動が思うようにできなかった」（32.1%）、「友達づくりがうまくいかなかった」（30.7%）などが3割を超えている。

学年ごとの違いに着目すると、4年生はコロナ禍以前の2019年4月に入学した学年のため、影響を受けたのは大学入学後であり、1年次には従来どおりの学生生活を送っていた。25.7%が「特になし」を選んでいる。

入学直前の2020年3月13日に「新型コロナウイルス対策の特別措置法」が成立し、4月16日に緊急事態宣言が全国に拡大されるなど、コロナ禍の混乱のなかで大学生活をスタートさせたのが3年生（2020年4月入学）である。彼らは、「大学での部活動やサークル活動が思うようにできなかった」（62.4%）、「友達づくりがうまくいかなかった」（54.1%）のように、大学での活動や友人ネットワークの構築に大きな影響を受けていたことがわかる。

2年生と1年生は、高校時代にコロナ禍に入った学年であり、「高校時代に学校行事ができなかった」「高校時代の部活動が思うようにできなかった」を選んだ割合が高い。大学での部活・サークルや友達づくりは、2年生でもそれぞれ5割から4割弱が挙げているが、1年生では1割台となり、感染対策を徹底しながらも大学生活が徐々に平時に近づいたことがわかる。

学習や進路については、2年生の1割弱が「進学する大学を変えざるを得なかった」を選んで

いる。「就職活動がうまくいかなかった」を選んだ学生は4年生で5.7%、3年生で2.8%となった。「留学」「アルバイト」については、学年が下がるごとに影響を受けたという割合が低いが、今回の調査ではグローバル・スタディーズコースの回答者が少なかったこともあり、実際に留学を断念した学生はさらに多かったのではないかと⁽²⁾。

なお、性別による違いを確認すると、女子は男子よりも「高校の学校行事」「高校の部活動」を選ぶ割合が約10ポイント程度高く、男子は女子よりも「特になし」を選ぶ割合が9ポイント高かった（いずれも χ^2 検定で $p < .05$ 。表は省略）。それ以外の項目では男女差はなかった⁽³⁾。

表1. 新型コロナウイルス感染症の流行による影響（学年別、複数回答の%）

	進学先の変更	高校の学校行事	高校の部活動	大学の部活動やサークル	留学の断念	アルバイト	友達づくり	卒業後の進路	就職活動	特になし
全体 (N=433)	4.6	45.5	32.1	43.6	5.3	17.1	30.7	0.7	1.8	14.3
1年生 (N=130)	4.6	80.0	55.4	17.7	1.5	2.3	13.1	0.0	0.8	13.1
2年生 (N=124)	9.7	65.3	52.4	50.0	4.0	17.7	37.1	2.4	0.0	7.3
3年生 (N=109)	1.8	11.0	1.8	62.4	8.3	25.7	54.1	0.0	2.8	16.5
4年生 (N=70)	0.0	0.0	0.0	51.4	10.0	30.0	15.7	0.0	5.7	25.7
χ^2 値 (df=3)		192.8	134.7	54.9		34.0	56.9			13.0
p値		<.001	<.001	<.001		<.001	<.001			<.01

注) χ^2 検定の結果は、期待度数5未満のセルが生じない項目にのみ記載した。

表2. コロナ禍での家族の状況（学年別、複数回答の%）

	経済状態が悪化	家族が転職や退職	長期間会えなかった	ストレスが溜まった	いっしょにいて家族の絆が深まった	つながりをとり助け合うことが増えた	いっしょにいて家族の絆が深まった	ない	あてはまるものはない
全体 (N=433)	12.2	2.3	24.2	12.9	14.8	11.3	42.5		
1年生 (N=130)	4.6	2.3	18.5	15.4	16.9	13.8	46.9		
2年生 (N=124)	21.8	4.8	31.5	11.3	11.3	8.1	38.7		
3年生 (N=109)	15.6	0.9	22.9	11.9	18.3	10.1	39.4		
4年生 (N=70)	4.3	0.0	24.3	12.9	11.4	14.3	45.7		
χ^2 値 (df=3)	27.8		6.0	1.1	3.4	2.9	2.5		
p値	<.001		.11	.78	.33	.41	.48		

注) χ^2 検定の結果は、期待度数5未満のセルが生じない項目にのみ記載した。

次に、コロナ禍での家族の状況や変化について、「コロナ禍で、あなたのご家族に、次のようなことはありましたか。」と複数回答で尋ねた（表2）。

全体では「あてはまるものはない」が42.5%となっており、4割強の学生は、ここで挙げられたような変化はなかったと回答している。「遠くに住んでいる家族と、長期間会えない状態が続

いた」という回答は24.2%、「家族が転職や退職した」は2.3%、それ以外の変化はそれぞれ1割強が選択していた。

学年による違いがあったのは「家の経済状態が悪化した」のみで、相対的には2年生や3年生の回答が多かった。4年生は新型コロナウイルス感染症の流行初期にすでに大学に入学していたのに対して、2年生・3年生が入学する際には、コロナ禍の影響が生じていたことや、大学進学に関連して家族の仕事や家計についての話題が出やすかった可能性も考えられる。

性別では、全般的に、男子よりも女子の方が家族との関係に変化があったと感じていた（表は省略）。男女差がある項目のうち、「遠くに住んでいる家族と、長期間会えない状態が続いた」（男子19.0%、女子27.9%、 $\chi^2(1)=4.5$, $p<.05$ ）,及び「いっしょにいる時間が長くなりストレスが溜まった」（男子7.6%、女子16.4%、 $\chi^2(1)=7.3$, $p<.001$ ）では女子の選択率が高く、「あてはまるものはない」では男子の選択率が高かった（男子51.6%、女子35.7%、 $\chi^2(1)=11.0$, $p<.001$ ）。新型コロナウイルス感染症の流行による影響でもコロナ禍での家族の状況でも、男子は相対的に、コロナ禍の影響を感じていないという回答が多い。

3. 学生の孤立

コロナ禍において、キャンパス内外で対面での対人コミュニケーションが制限されたことで、学生が良好な人間関係を構築する機会が損なわれ、孤立する学生もいるのではないか。ここでは、学生の社会的孤立の問題（石田 2011）を社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の欠如と捉えて検討する。

社会関係資本の保有状況は連続量として把握することもできるが、社会的孤立の観点からは、社会関係資本を「保有していない」、すなわち社会関係が0になる状態に陥らないことが重要であるとともに、社会関係が1つに限られる状況も脆弱な状態と考えられる。1つのサポート源に愛着を持ち依存することが、新たな社会関係の構築の妨げになることもあるからである（浦 2009；金澤 2014）。ここでは、金澤（2014）と同様に、社会関係資本の保有状況を、まったく保有していない「孤立者」、サポートの入手先が1つに限られる「孤立予備軍」、そして入手先が複数ある「複数保持者」の3つの類型にまとめる。

第1の社会関係資本として「精神的な悩みや心の健康の問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」の相談相手（複数回答、以下「悩みの相談相手」）を取り上げる。これは情緒的サポートのネットワークに該当するが、ここでは相談相手を1つも選ばなかった者を「孤立者」、相談相手を1つだけ選んだ者を「孤立予備軍」、複数選んだ者を「複数保持者」とする。

第2の社会関係資本は、コロナ禍の学生の状況を検討するため「現在の自宅で、感染症にかかり隔離生活をせざるを得なくなったとき、助けを求めることができる人」（複数回答、以下「感染時の援助」）を用いる。これは道具的サポートのネットワークである。操作化の方法は情緒的サポートと同じように3カテゴリーに分類した。

以上2つの変数から学生の孤立状況を確認すると(表3), 悩みの相談相手(情緒的サポート)でも, 感染時の援助(道具的サポート)でも, 誰にも相談しない, つまりサポート源を1つも持たない「孤立者」は30名程度, 7%台とほぼ同水準だった。

一方, サポート源が1つである「孤立予備軍」は, 悩みの相談相手では20.5%, 感染時の援助では46.2%を占めている。「孤立予備軍」が唯一挙げているサポート源が何かを確認すると, 悩みの相談相手(表4)では「自分の親」(40.9%)が最も多く, 次いで「大学以外の友人・知人」(27.3%), 「大学の友人」(26.1%)となっていた。精神的健康の観点では医療機関などで専門家に相談することも重要だが, 「専門家やサービス機関」を選んだのは2.3%に過ぎず, 孤立予備軍にある学生のほとんどは身近な家族か親しい友人にだけ相談する傾向にある。

感染時の援助(道具的サポート)では70.0%が「家族」を挙げ, 次いで「大学の友人」が24.0%である(表5)。悩みや心の健康の問題については「大学以外の友人・知人」という, 高校時代までの友人も含めた友人・知人に相談する者もいたが, 感染の際の援助については感染リスクなども考えれば, より身近な家族に依存せざるを得ないこと, また一人暮らしの場合には近くに住む大学の友人を挙げているということだろう。

それ以外の「大学の教員や職員」「近所の人」「アルバイト関係者」は, 孤立予備軍がサポートを求める対象とはなっていないことも指摘できる⁽⁴⁾。

表3. 学生の孤立状況

	悩みの相談相手 (情緒的サポート)		感染時の援助 (道具的サポート)	
	N	%	N	%
孤立者	31	7.2	33	7.6
孤立予備軍	88	20.5	200	46.2
複数保持者	311	72.3	200	46.2
合計	430	100.0	433	100.0

注) 情緒的サポートでは, 選択肢「誰もいない」も含めて1つも選択しなかった3人を欠損値として処理した。

表4. 孤立予備軍のサポート源 (悩みの相談相手)

	N	%
自分の親	36	40.9
自分の兄弟姉妹	3	3.4
その他の親族	0	0.0
大学の友人	23	26.1
大学以外の友人・知人	24	27.3
大学の教員や職員	0	0.0
近所の人	0	0.0
アルバイト関係者	0	0.0
専門家やサービス機関	2	2.3
合計	88	100.0

表5. 孤立予備軍のサポート源（感染時の援助）

	N	%
家族	140	70.0
親戚	5	2.5
大学の友人・知人	48	24.0
大学以外の友人・知人	5	2.5
大学の教員や職員	0	0.0
近所の人	0	0.0
その他	2	1.0
合計	200	100.0

このように、孤立していたり、あるいは頼れるのがごく限られた相手しかいない学生たちは、具体的にはどのような状況にいるのだろうか。ここでは、この孤立状況（3類型）を従属変数として、その要因を探るため多項ロジスティック回帰分析をおこなう。

独立変数のうち、本人の属性については、性別（男子ダミー）、学年（4年生を基準カテゴリーとするダミー変数）、居住状況（実家ダミー）、出身県（「その他の県」を基準カテゴリーとする山形県出身ダミーと宮城県出身ダミー）を用いた。出身県については、山形大学では地元の山形県出身者だけでなく宮城県出身の学生が多いことを考慮した⁽⁵⁾。また、経済状況の指標として、主観的な経済状況（「あなた自身の現在の経済状況について、どのように感じていますか」に対する4件法での回答）を⁽⁶⁾、また学生生活の状況について「大学の部活動やサークル活動」など、4つの活動への参加状況（参加していれば1、していなければ0）を用いた。

なお、ここからは、2つのサポートネットワークも含めて、すべての変数に回答が得られている424人のデータを分析する⁽⁷⁾。

表6が、悩みの相談相手（情緒的サポートのネットワーク）についての分析結果である。左側に孤立と孤立予備軍の比較、右側に複数保持者と孤立予備軍の比較の結果を示した。

孤立と孤立予備軍の比較で有意な効果があるのは「性別」（男子ダミー）と「主観的経済状況」である。男子学生は女子よりも孤立しやすく、経済的に余裕がない学生ほど孤立しやすいリスクがある。一方、複数保持者と孤立予備軍の比較では、「実家暮らし」と「大学内のサークル活動」の有意な効果がみられた。実家で生活している学生や、大学内で部活動やサークル活動をしている学生は、複数のサポート源を持つ傾向がある。

続いて表7では、感染時の援助という道具的サポートのネットワークにおける孤立について検討する。孤立と孤立予備軍の比較では、「出身県」の山形県出身ダミーと宮城県出身ダミーによる負の効果がみられた。山形県出身や隣県の宮城県出身でない学生には、感染時に家族にさえ援助を求められず孤立するリスクがあることがわかる。一方、複数保持者と孤立予備軍の比較では、「実家暮らし」であることは複数保持になりにくい要因である。家族以外に頼る必要がないものと解釈できる。また、「大学内での部活動やサークル活動」に参加していること、「アルバイト」

をしていることが、複数保持につながる要因となっていた。なお、10%水準だが、ここでは男子が複数保持になりやすい傾向があった。

表6. 孤立の要因 (悩みの相談相手)

	孤立/孤立予備軍			複数保持者/孤立予備軍		
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)
切片	.308	.883		.484	.556	
性別 (ref. 女子)						
男子	1.011 *	.459	2.748	.329	.264	1.389
学年 (ref. 4年生)						
1年生	-.187	.704	.830	-.266	.410	.766
2年生	-.222	.692	.801	-.246	.403	.782
3年生	.216	.662	1.241	-.030	.419	.970
居住状況 (ref. 実家以外)						
実家	.748	.554	2.112	.713 *	.308	2.040
出身県 (ref. その他)						
山形県出身	-.669	.658	.512	-.325	.368	.723
宮城県出身	-.545	.590	.580	-.318	.336	.728
主観的経済状況	-.519 *	.257	.595	.125	.147	1.133
大学内のサークル活動	-.328	.496	.721	.604 *	.268	1.829
大学外のサークル活動	-.754	1.129	.471	-.420	.504	.657
ボランティア活動	-.168	1.143	.846	.508	.519	1.661
アルバイト	-.524	.460	.592	.264	.284	1.302
Nagelkerke's R ²				.107		
-2LL				510.134 *		
N				424		

* p<.05

表7. 孤立の要因 (感染時の援助)

	孤立/孤立予備軍			複数保持者/孤立予備軍		
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)
切片	-1.047	.209		-.744	.119	
性別 (ref. 女子)						
男子	.453	.400	1.573	.384 †	.220	1.468
学年 (ref. 4年生)						
1年生	.666	.689	1.946	-.205	.340	.815
2年生	.750	.656	2.118	-.350	.341	.705
3年生	.556	.686	1.743	.100	.342	1.105
居住状況 (ref. 実家以外)						
実家	-.206	.572	.814	-.636 *	.256	.529
出身県 (ref. その他の県)						
山形県出身	-1.340 *	.638	.262	.108	.319	1.114
宮城県出身	-1.259 *	.566	.284	.196	.295	1.216
主観的経済状況	-.218	.229	.804	.054	.123	1.055
大学内のサークル活動	-.454	.425	.635	.504 *	.224	1.655
大学外のサークル活動	-.523	1.086	.593	.042	.444	1.043
ボランティア活動	-.652	1.085	.521	.379	.395	1.461
アルバイト	.182	.436	1.199	.690 **	.246	1.994
Nagelkerke's R ²				.135		
-2LL				611.275 **		
N				424		

† p<.10, * p<.05, ** p<.01

以上より、2つのサポート・ネットワークにおける孤立の要因を比較すると、悩みの相談相手という情緒的サポートのネットワークでも、感染時の援助という道具的サポートのネットワークでも、実家暮らしや県内・隣県出身であるなど、家族や親族、あるいは地元の友人も含めた親しい人びとへのアクセスのしやすさや、大学での部活動やサークル、アルバイトなど、学内外にネットワークを持っていることが、サポート源の確保や増加につながっていた。また、コロナ禍前に入学した4年生に比べて、コロナ後に入学した学年が孤立している傾向はみられなかった。まさにコロナ禍の混乱のなかで入学した学年であっても、対面授業が実施されるようになった3年次終盤の時期までには、少しずつ友人や知人を作ることができたのかもしれない⁽⁸⁾。

なお、悩みの相談については、男子や、自分は経済的に余裕がないという認識を持つ学生で孤立のリスクが高いことも確認しておきたい。

4. 不安感と精神的健康

最後に、コロナ禍における孤立や学生生活状況と、学生の不安感や精神的健康との関連を重回帰分析により検討する。

1つめの従属変数は、学生生活における不安を4つの項目で尋ねた、不安感の合計である。具体的には「大学での学習」「卒業後の進路選択」「就職活動」「就職後の仕事」の4項目について、それぞれ「1 不安を感じていない」から「4 不安を感じている」までの4件法で尋ね、選択肢の番号の値を合計した得点である（理論上の範囲は4点から16点。 $\alpha = .883$ ）。

もう1つの従属変数は、抑うつ傾向を測定するK6である。K6はケスラーら（Kessler et al. 2002）が考案した6項目からなる尺度で、ここで用いたのはその日本語版（Furukawa et al. 2008）である。具体的には、過去30日について「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」など6項目についてその頻度を5件法で尋ねたうえで、各項目に0点から4点を付与して合計したものである（理論上の範囲は0点から24点。 $\alpha = .886$ ）。

独立変数は、さきの多項ロジスティック回帰分析と同様に、性別（男子ダミー）、学年（4年生を基準にした3つのダミー変数）、居住状況（実家ダミー）、出身県（「その他の県」を基準にした、山形県出身ダミーと宮城県出身ダミー）、主観的経済状況を用いた。また、悩みの相談相手（情緒的サポート）と感染時の援助（道具的サポート）からの孤立の状態（3類型）を、それぞれ、孤立予備軍を基準にした孤立者ダミーと複数保持者ダミーとして使用した。以上の変数群は強制投入している。

さらに、コロナ禍での生活状況のうち学生の不安感や精神的健康に影響することが考えられる要因として、新型コロナウイルス感染症による影響（表1を参照）及び、コロナ禍の家族の状況（表2を参照）の各項目を取り上げ、ストップワイズによる変数選択をおこなった。

表8に示したのが最終的に採択されたモデルである。左側に示した、不安感（合計）を従属変数にした分析からみていこう。強制投入した独立変数で有意な正の効果があるのは、学年である。

表8. 不安と抑うつ傾向の要因

	不安感 (合計)			K6		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
(定数)	9.173 ***	.624		7.729 ***	1.142	
性別 (ref. 女子)						
男子	-1.059 ***	.269	-.156	-1.457 **	.493	-.136
学年 (ref. 4年生)						
1年生	4.840 ***	.409	.660	1.585 *	.743	.137
2年生	5.346 ***	.419	.722	1.937 *	.756	.165
3年生	4.388 ***	.438	.570	1.638 *	.797	.135
居住状況 (ref. 実家以外)						
実家	.386	.324	.057	.225	.588	.021
出身県 (ref. その他の県)						
山形県出身	-.436	.398	-.060	-1.113	.722	-.097
宮城県出身	-.642 †	.365	-.094	-1.348 *	.664	-.124
主観的経済状況	-.510 **	.156	-.131	-.719 *	.283	-.117
相談孤立 (ref. 孤立予備軍)						
孤立者	.834	.583	.064	2.229 *	1.059	.108
複数保持者	.292	.338	.039	-.653	.615	-.055
感染孤立 (ref. 孤立予備軍)						
孤立者	.898 †	.522	.072	1.825 †	.949	.092
複数保持者	.051	.281	.008	-.510	.516	-.048
ステップワイズ						
家族といるストレス				2.946 ***	.747	.184
友達づくりの失敗	.936 **	.307	.129	1.660 **	.564	.145
卒業後の進路の変更	-3.377 *	1.577	-.084			
家族の転職・退職	-1.803 *	.869	-.082			
R^2		.383 ***			.185 ***	
Adj. R^2		.361 ***			.157 ***	
N		424			424	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

1, 2, 3年生は4年生より高い, すなわち4年生の不安感が低いということになる。調査を実施した1月下旬には, 多くの4年生の進路は決まり, 卒業論文を提出するなど, 大学での学習をほぼ終えつつある時期のため, ここで尋ねた大学生活についての不安感が低いのは当然かもしれない。また, 10%水準だが, 感染時のサポート源がない孤立者は, サポート源が1つの孤立予備軍よりも不安が高い傾向にある。一方, 負の効果があるのは, 性別 (男子は女子よりも低い), 主観的経済状況 (経済的に余裕がないと, 不安感が高い) である。さらに, ステップワイズでは, コロナ禍で「友達づくりがうまくいかなかった」ことの正の効果と, 「卒業後の進路希望を変えた」「家族が転職や退職をせざるを得なくなった」の2変数の負の効果がある。大学入学後に友人ネットワークの形成が滞ったことが不安感を高めることは解釈しやすいのに対して, 本人の進路希望の変更や家族の転職・退職が不安感にマイナスの効果をもたらすことは解釈が難しいが, 実際にこれらの選択肢を選んだ回答者は少なかった (表1及び表2)。こうした出来事が起こった時点から調査時までの時間経過のなかで, これらの変化を踏まえた取り組みが模索され, 前向きな捉え方ができている可能性もあるだろう。

一方、表8の右側に示したK6では、性別、学年、本人の主観的経済状況など、属性にかんする変数の効果は不安感の場合と同様である。宮城県出身ダミーは、5%水準で有意な負の効果がみられ、不安感でも10%水準で同じ方向での傾向があった。山形県出身ダミーも符合は負であることから、弱い効果だが、この2つの県を除く「その他の県出身」の場合に不安が高かったり、抑うつ傾向があると考えられる。孤立にかんしては、こちらでは悩みの相談におけるサポート源を持っていない孤立者の抑うつ傾向が高く、感染時の孤立も10%水準で同様の傾向がみられた。最後に、ステップワイズでは、不安感と共通で「友達づくりがうまくいかなかった」ことの正の効果があったほかに、「(家族と) いっしょにいる時間が長くなりストレスが溜まった」ことの正の効果もみられた。

以上より、男子よりも女子で不安感や抑うつ傾向が高いこと、経済的に余裕がないことや孤立も不安感や抑うつ傾向を高めることが確認できた。ステップワイズで投入した項目のなかでは、友だちづくりや家族との関係といった人的ネットワークの変数が有意な効果を持っていた。

5. 考察

本稿では、2023年1月から2月にかけて山形大学人文社会科学部の学生を対象に実施した横断調査のデータを分析し、コロナ禍での学生生活の状況を記述するとともに、孤立の状況や、不安感及び抑うつ傾向につながる要因を検討してきた。得られた知見をまとめると、以下のようになる。

- (1) コロナ禍での学生生活について、新型コロナウイルス感染症の流行による影響は、学年ごとに異なっていた。コロナ禍で入学した3年生(2019年度入学)が最も大きな影響を受けていた。一方、2年生や1年生の回答からは、大学生活がコロナ前のあり方に徐々に近づきつつあることがうかがえた。家族における変化や家族関係については、変わっていないという学生が4割強を占めているが、相対的には、男子よりも女子が家族の様子に敏感に反応していた。
- (2) 孤立の状況を情緒的サポート(悩みの相談相手)と道具的サポート(感染時の援助)について分析したところ、いずれの場合もサポート源を持たない孤立状態にある学生が7%程度(約30人)存在していることがわかった。孤立と孤立予備軍、孤立予備軍と複数保持者の比較では、居住の状態(実家か否かや、県内または隣県の出身か)、サークルへの参加やアルバイトの有無が関連していた。また、悩みの相談については、男子や、経済的に余裕がない学生が孤立しやすい傾向があった。
- (3) 不安感と抑うつ傾向については、男子よりも女子が高い傾向にあること、経済的に余裕がないことや孤立も関連していることが確認できた。ほかに、友だちづくりや家族との関係といったネットワークの形成や維持に関わる要因の効果もみられた。

コロナ禍のように影響を受ける人びとが多数存在し、その影響が均一ではない状況では、ターゲットを明確にしたサポートを実施することも効果的ではないか。今回の分析からは、男子が孤立しやすい一方で、不安感や抑うつ傾向は女子のほうが高いこと、実家暮らしか一人暮らしか、出身県（山形県や宮城県か、それ以外か）などによっても、孤立のリスクが異なっていることがわかった。このような要因に着目し友人ネットワークを構築する機会を設けるなど、対象となる学生を絞った効果的な支援が可能になるのではないか。

また、学生の経済状況は、孤立や不安感、抑うつ傾向にも関連していた。貧しさは他者への信頼や対人関係への満足度を劣化させるとも言われる（浦 2009）。困窮する学生に対しては、奨学金や授業料免除など金銭面での支援の充実が不可欠だが、コロナ禍ではフードバンクや生理用品の配布のような物資の提供など、さまざまな形でサポートが展開されるようになった。こうした取り組みは今後も必要となるだろう。

分析から、孤立者は回答者の7%程度という数字を示したが、この調査で協力が得られた学生は学部の入学定員の4割弱である。実際に孤立している学生はさらに多いと考える必要があるかもしれない。調査に回答していない学生には、授業にあまり出席していない者や、大学から連絡を取るのが難しい者も含まれているはずだ。そのような学生に働きかけをおこなうのは難しい面もあるが、彼らが困ったときに、あるいはそのような状況に陥る前に、自ら援助を求めたり、相談窓口につながりやすくなるような取り組み（大杉 2023）を継続することも重要である。

注

- (1) コロナ禍をまたいだ思春期のコーホート調査から、コロナ禍前に16歳だった群に比べて、コロナ禍で16歳になった群の抑うつ症状は、特に男子で、年齢による自然な変化を上回り悪化しているとの報告もある（Hosozawa et al. 2023）。
- (2) 人文社会科学部の各コース、各学年から満遍なく回答が得られているわけではない。詳しくは（阿部 2024）を参照。
- (3) 性別を「その他」とした回答者5人は、性別を用いる分析では欠損値として処理した。
- (4) この調査では、他にも4つの場面を想定したサポート・ネットワークを尋ねている。それらの分布については（大杉 2024）を参照。
- (5) 回答者の出身地は宮城県が172人（38.8%）、山形県が138人（31.2%）となっており、宮城県出身の172人のうち96人が宮城県に居住して通学している（阿部 2024）。
- (6) 経済状況については、「あなたの家族の現在の経済状況」と「あなた自身の現在の経済状況」を尋ねており、両者の間に強い正の相関関係がみられるが（ $r=.495$ ）、ここでは本人の主観的経済状況（後者）を用いた。

- (7) 主な変数の基本統計量を付表1に示した。
- (8) 学年ごとの違いには、コロナ禍における種々の経験の有無のみならず、学年が進み年齢を重ねたことによる効果も含まれている。こうした点を踏まえた厳密な検討は、この時期に1度だけ実施した横断調査のデータでは難しく、学年進行に合わせたパネルデータが必要である。

付表1. 主な変数の基本統計量 (N=424)

悩みの相談相手		
孤立者	.07	
孤立予備軍	.20	
複数保持者	.73	
感染時の援助		
孤立者	.08	
孤立予備軍	.45	
複数保持者	.47	
男子タミー	.43	(.50)
学年		
1年生	.30	
2年生	.29	
3年生	.25	
4年生	.16	
居住状況		
実家タミー	.42	(.49)
出身県		
山形県出身	.31	
宮城県出身	.39	
その他	.30	
主観的経済状況	2.56	(.86)
活動		
大学内のサークル活動	.47	(.50)
大学外のサークル活動	.06	(.24)
ボランティア活動	.08	(.27)
アルバイト	.72	(.45)
不安感 (合計)	11.87	(3.36)
K6	6.39	(5.31)

注) 値は割合または平均値 (標準偏差) である。

引用文献

- 阿部晃士, 2024, 「『コロナ禍の学生生活に関する調査』の目的と概要」『山形大学人文社会科学部研究年報』21: 171-175.
- 藤原翔, 2021, 「中学生と母親パネル調査からみる COVID-19: 若者の仕事, 教育, 健康へのインパクト」『社会科学研究』72(1): 107-28.
- Furukawa TA, Kawakami N, Saitoh M, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T and

- T Kikkawa, 2008, "The performance of the Japanese version of the K 6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan," *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 17(3): 152-158.
- 本多薫, 2024, 「コロナ禍を経験した文系学生のオンライン授業における意識と課題：オンライン授業と対面授業の比較から」『山形大学人文社会科学部研究年報』21：191-209.
- Hosozawa, M., Ando, S., Yamaguchi, S., et al., 2023, "Sex difference in adolescent depression trajectory before and into the second year of COVID-19 pandemic" *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*. <https://doi.org/10.1016/j.jaac.2023.08.016>
- 石田光規, 2011, 『孤立の社会学：無縁社会の処方箋』勁草書房.
- 石川悦子, 2022, 「コロナ禍における大学生の学生生活に対する不安感とストレス」『こども教育宝仙大学紀要』13：13-20.
- 伊藤美奈子・栗本美百合・白水倫生, 2021, 「コロナ禍による大学生のストレスと大学生活への意識」『人間文化総合科学研究科年報』（奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科）36：25-37.
- 金澤悠介, 2014, 「社会関係資本からみた社会的孤立の構造」辻竜平・佐藤嘉倫（編）『ソーシャル・キャピタルと格差社会：幸福の計量社会学』ミネルヴァ書房, 137-152.
- 中澤渉・藤原翔, 2021, 「COVID-19 が及ぼす若年層への影響：パネル調査のデータ分析」『理論と方法』36（2）：244-258.
- 大杉尚之, 2023, 「山形大学生の相談相手の実態と相談窓口の利用：2022年度の大学生の調査から」『山形大学大学院社会文化創造研究科社会文化システムコース紀要』20：1-10.
- , 2024, 「コロナ禍の学生生活を経験した大学生の援助希求と精神的健康」『山形大学人文社会科学部研究年報』21：211-226.
- 浦光博, 2009, 『排斥と受容の行動科学：社会と心が作り出す孤立』サイエンス社.

謝辞

調査に回答して下さった学生の皆様と、調査実施にご理解・ご協力くださった学部教員の皆様に感謝申し上げます。

Social Isolation, Anxiety, and Mental Health of University Students in the COVID-19 Pandemic

Koji ABE

The purpose of this paper is to examine the lives of university students during the COVID-19 pandemic crisis in terms of social isolation, anxiety, and Mental Health. The study will then explore how to support affected students. For the analysis, we used data from a web-based survey conducted among students at Yamagata University from January to February 2023.

The analysis showed that students enrolled in 2020 were the most affected in their student life. For example, they had difficulty making friends.

Second, about 7% of the students were found to be isolated, with no one to talk to about their problems or to seek help if they contracted an infectious disease. The risk of isolation was associated with gender, housing status, participation in clubs, and having a part-time job. There was also a tendency for students who were not economically well-off to be more isolated.

Third, female students had a tendency to have higher levels of anxiety and depression than male students. These were related to financial insecurity and isolation. In addition, there were effects of factors related to the formation and maintenance of social networks, such as making friends and family relationships.

Based on the results of this analysis, it may be effective to implement targeted support in situations such as the COVID-19 crisis, which can be considered a type of catastrophe. It is also important that students who tend to be absent from school are empowered to seek assistance on their own.